

6 月 総領事メッセージ

6 月は夏らしい晴天が続きます。この季節は夏休み前、また学校は学年末となり 1 年で最も忙しい季節の 1 つです。今月はトロントでも興味深い重要な行事も目白押しでした。今年も日系文化会館(JCCC)で、8 日から 2 週間にわたりトロント日本映画祭が開催されました。日本からは沖田修一監督がご自身の作品である「さかなのこ」上映に合わせてトロントを訪問されました。



沖田修一監督と

1、トロントで活躍する日本人

(1)リくりゅうペア(アイススケート 三浦璃来、木原龍一ペア)

今シーズンフィギュアスケートのペアでグランプリファイナル、4 大陸選手権、世界フィギュアスケート選手権の全てで優勝、シーズングランドスラムを達成された三浦璃来、木原龍一ペア(リくりゅうペア)は、トロント近くのオークビルが拠点です。実質的なシー

ズン終了後も練習を続けられているお忙しい中、お二人がマッサージセラピストの青嶋正先生と共に公邸においでいただき、お話を聞くことができました。

りくりゅうペアがオークビルに拠点を置いたのは 2019 年。コロナが始まる少し前でした。ペアでは世界随一のコーチであるブルーノ・マルコットコーチがオークビルを拠点とされていたからです。

小さい頃ミッキーとミニーがアイススケートをしているのを見て、スケートに憧れた三浦選手。様々な習い事から唯一続いたスケートを続けてきた木原選手。お二人がペアを組んだのは、最初に出会った練習で、お互いにペアを組むにはこの人しかいないという直感が働いたからだそうです。三浦選手は小柄ですが、ペア競技においては、ペア間の体格差も有利な条件となります。

カナダでは、冬のスポーツは大変に人気がありますが、その指導の特徴は常にポジティブシンキングをすることだそうです(全くレベルの異なる話ですが、ゴルフコンペの前ではネガティブなことばかり頭に浮かんでしまう自分とは全く違うメンタルトレーニングをされておられるわけです。。。)。練習を含めてうまくいった記憶を呼び覚まし、ただし、この点とこの点は留意しましょう、という指導となるそうです。北京五輪では、すでに団体戦のメダリストであるお二人ですが、ペア競技では今シーズン大ブレイク。一気に世界の頂点に立ち、追われる立場になりました。

青嶋先生は、スポーツトレーナーとして長くトロントで活躍され、トップアスリートを含め数多くのメダリストも指導してこられました。スケートでは、羽生結弦選手のトレーナーでもありました。トップアスリートともなると、自分の流儀にこだわる方も少なくなく、青嶋先生の指導を受け入れるまでに時間がかかるケースもままあるそうです。また頂点を極めた選手はその地位を維持するのが大変ですが、りくりゅうペアは練習や競技に対する姿勢が全く変わらず、謙虚さを持って今も練習を続けておられるとのことでした。

りくりゅうペアが来シーズン以降も活躍され、オークビルから元気な姿を世界に発信し続けていかれることを期待したいと思います。



りくりゅうペアとグループショット



りくりゅうペア、スケートリンクの上で2ショット

(左から佐々山総領事、佐々山総領事夫人、三浦選手、木原選手、青嶋先生、松井領事、国際交流基金山本所長、鈴木副領事)

(2)写真家 杉野信也氏

18歳の時にスーツケース2つだけ(本人談)で単身、杉野氏はトロントに移住してこられました。既に芸術写真に対するビジネスを始めておられ、その才能を見出されたのが理由ですが、アートスタジオを始められ、様々な経験を積み商業写真から芸術性の高い写真、ポートレートなど幅広い分野で国際的に活躍されてきました。カンヌで国際広告祭金賞をされたこともあります。

杉野氏からはそのご経験と今後の写真界の目指す方向について、造詣の深いお話を伺うことができました。そのお話からは、常に新しいことを吸収しようとする旺盛な好奇心と物事に対する深い洞察力を感じました。例えば、杉野氏は写真界に当時まだ珍しかったデジタル技術を持ち込まれました。被写体である有名な俳優さんたちとの興味深い交流。商業的作品の中では、今でも大手企業が使用を続けている作品が多くあります。最近話題となっている画像生成 AI についてもひとしきり話題となりました。著作権等の問題はありますが、デジタル技術が写真の世界で普通のものになったように画像生成もツールの1つとして活用されていく、それをどのように自らの作品や考えに取り込むかということが課題になっていくだろうというお話でした。杉野氏の先見性、先取の精神を垣間見させていただきました。

なお、現在同氏の作品展(「Déjà vu」)が日系文化会館にて開催されています。



杉野御夫妻とグループショット

(左から松井領事、佐々山総領事夫人、佐々山総領事、杉野信也氏、杉野夫人)

(3)高坂 絵里 トロント・シンフォニー・オーケストラ(TSO) プリンシパル第二バイオリン

もともとは米国を拠点にされておられた高坂さんがトロント・シンフォニー・オーケストラに入団されたのは2012年でした。その後、活躍が認められ 2022 年からは第二バイオリンを務めておられます。

トロントシンフォニーは、北米を代表する交響楽団の1つです。小澤征爾が1965年から4シーズンにわたり音楽監督を務めたことでも有名です。現在の音楽監督は、スペイン出身のグスタボ・ヒメノ氏。マエストロ・ヒメノはコロナ禍中の就任となりましたがこのシーズンはフルに指揮を執られました。

比較的コンテンポラリーな作品からクラシックまでその高い技術、まとめ、創造性に感銘を受けました。演奏会のあと、マエストロの控え室でお話を伺う機会がありましたが、その際、お部屋に小澤征爾のレコードが飾られていました。聞けばこのレコードは、1960年代にメサイアの Turangalila という大曲を TSO としてはじめてレコーディングされたものでした。そのレコーディングから50年以上たった昨年、マエストロは再び同じ曲をレコーディングされたそうです！（来年CDリリースされるとのこと。）

高坂さんはそのようなオーケストラで第2バイオリンの重要なポジションで演奏されておられます。今後のますますのご活躍を期待したいと思います。



ヒメノ氏及び高坂氏とグループショット

（左から佐々山総領事夫人、高坂氏、ヒメノ氏、佐々山総領事）



演奏中の高坂氏



ポスターにも高坂氏が掲載されていました。

(4)カナダ国立バレエ(NBC) 江部プリンシパル、国立バレエ学校

今年のメッセージの3月分にて、カナダ・ナショナル・バレエの佐藤航太さんを紹介いたしましたが、今月はさらにプリンシパルの江部直哉さん、石原古都さんにもお見にかかることができました。江部さんは2015年からプリンシパルを務めておられます。カナダ・ナショナル・バレエは年間を通じて公演がありますが、今シーズンは「ロミオとジュリエット」を公演しています。江部さんは今回ロミオを演じられました。相手のジュリエット役の方は、今回が主役デビューとのことでしたがさすがにNBCのプリンシパル、2人の呼吸もぴたりで、芸術性の高い重厚な演技に圧倒されました。

石原さんは米国、特にサンフランシスコで長く経験を積まれてきましたが、トロントに移られ 2021 年からプリンシパルを勤めておられます。この夏には日本での公演も控えておられるとのことでした。

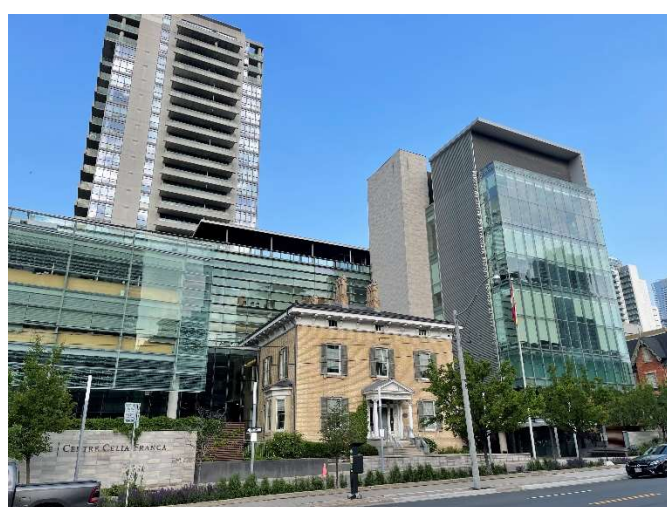
一つの題目で 10 日間ほどの期間の公演が続きます。昼と夜の一日二回の公演は長丁場です。体調調整のため急遽代役を立てることもあるそうです。このためカンパニーのメンバーは出演の予定がなくても常にスタンバイしておく必要があります。急な役の依頼もあるので、勉強、練習も欠かせません。公演中のメンバーの緊張度、集中度は高いそうです。

その一方で NBC はカンパニーとして非常に家族を大事にする方針だそうです。今回の公演のあとも出演者の子供さんやご両親が観劇にお見えでした。

また、今月バレリーナを養成するカナダ国立バレエ学校も訪問しました。トロントの中心部にあり、日本の学年で言えば中学から高校にかけて学業を修めながらバレエのレッスンに専念できる場所です。隣接して寄宿舎も整備されています。1 学年は 20 数名。その中で日本人の生徒が現在 12 名在籍しておられます。またバレリーナ養成だけではなく、バレエの先生も教育する過程があります。ここにも欧州でレッスンを重ねてこられた日本人の方が在籍しておられました。このような若手から指導者の養成に至るまで一貫して教育を行う施設は世界でも珍しいとのことでした。

一番若手の生徒さんは、12 歳の学生さん。近年、日本の若者は内向きになったと言われて久しいですが、ここトロントには世界を目指す若者が集ってきています。この過程を終えれば、世界中のバレエ・カンパニーのオーディションを受け、若きバレリーナとして巣立って行きます。カナダ国立バレエ学校は、世界各地と交流をされていますが、日本との交流も深く、新国立劇場のバレエ研修所からも短期の研修に来ておられました。

バレリーナとして成功するには、身長や体格などの条件もあります。高い技術と志を持った方々がここトロントから巣立って行き、成功されることを祈りたいと思います。



2、アニメ・ノース

どこまでも続くコスプレの人波。初夏のトロントのアニメの一大祭典、アニメ・ノースが今年も開催されました。コロナ禍の影響も脱してこのイベントも完全に規制なしです。アニメ・ノースは非営利のボランティアによる運営ですが、全く自主的にこの規模でイ

イベントが開催されるという驚きと今やアニメは日本発で完全に自らの生命を得て独自の広大な世界を形作っている事実にも驚きました。参加者はトロントの多様性を反映したエスニックの広がり、私が特に注目したのは年齢層も広がっているということ。もはやアニメは若者の独占ではなく、高齢の方も多く思い思いのコスプレで参加されていました。内容は文字通り無数の自主的イベントが広大な会場で時間刻みで開催。自分のお目当ての会合に行かないと迷子になります。

今年も、総領事館と日本政府観光機構（JNTO）は、公益財団法人東京観光財団（TCVB）と共催で 1 時間半のイベントを企画しました。アニメをテーマにした訪日をテーマに、これから日本を訪れようというアニメファンにアピールを行いました。これからの訪日振興は、「量よりも質」。アニメ・ノースに来場するようなファンは必ず日本訪問のリピーターとなるでしょう。そのようなテーマを持った訪日カナダ人をこれからも掘り起こしていきたいと思えます。





3、ジョージ・ブラウン・カレッジ/「世界的美食都市」日本食調理実演イベント

トロントの中心部にキャンパスを構えるジョージ・ブラウン・カレッジは 1967 年の設立ですが、生徒数は 30,000 人近くであり、20 以上の実践的なコースを備えています。ホスピタリティー関係のコースも設置され、調理のコースも有名です。近年、学生にも人気の和食のコースの充実にも力を入れてきています。人気のあるイベントの 1 つに「世界的美食都市」というイベントがあり、年に 1 度、特定の国の料理が特集され、有名シェフが招かれます。今年は和食が取り上げられました。カレッジは、数々の著作がおありで、ニューヨークをベースに国際的に活躍されている真保裕子(しんぼひろこ)シェフを招きました。

三日間にわたるイベントの中では、カレッジの学生向けの講習のほか、一般者向けのイベントがあり真保シェフの講義を聞くことができました。

和食を理解するには、単に日本の食材を使うことや技術を習得するだけでは、理解は深まりません。その背景にある日本文化、さらに、それが形作られてきた考え方や思想なども理解することが不可欠です。真保シェフは、季節感や色彩、食感、また清純さや全体のバランスといった日本食、特に懐石料理を支える特徴の説明から入られます。さらに今日の懐石の源流として 17 世紀に形を整えていった茶懐石の歴史を紹介され、それをささえる思想としてとして陰陽五行などの考え方が背景にあることを説明されました。20 年以上、米国で活躍された真保シェフの講演には説得力があり、またプレゼンテーションも魅力に富んだものです。講演会は、応募者殺到で満席、立ち見も出るほどでした。

真保シェフが指摘されたとおり、日本文化の発信には、和食は極めて有効な手段ですが、懐石料理を育んできた歴史、その背景にある考え方などを理解しないと、真に和食を理解したとは言えません。私の月間メッセージでも、何度も和食の話題を取り上げてきましたが、このような活動は極めて貴重であり、今後とも継続させていく必要

があります。真保シェフは、教室で調理実習をされるだけではなく、日本食、日本の文化に興味がある人達と毎年日本を訪問するという活動も行っておられます。今年は九州がテーマだそうです。

領事館、日本政府としても、今後もジョージ・ブラウン・カレッジのような組織と連携を深め、和食の良さを伝える努力を継続していきたいと思います。



調理実演の様子(真保シェフ)



実演後に皆さんで集合写真を撮(左から鈴木副領事、鈴木領事館公邸シェフ、真保シェフ、佐々山総領事、Jon Klip シェフ)

4、サドベリー コテ金開発プロジェクト 住友金属鉱山 訪問

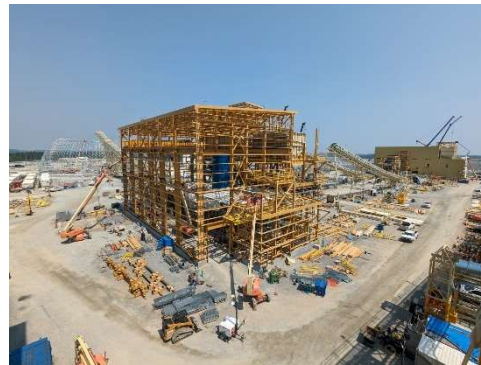
オンタリオ州は日本の 3 倍近くの面積があります。カナダといえば、アルバータ州を中心に石油や天然ガスが有名ですが、北極圏に続く広大な面積を有しているオンタリオ州は希少金属の宝庫でもあります。最近、電気自動車の車載バッテリーの生産地として、オンタリオ州が世界の注目を集めているのはこのためでもあります。

今月はトロントから飛行機で約 1 時間のサドベリーという昔から鉱工業で栄えた都市を訪問しました。2017 年 6 月住友金属鉱山はカナダのアイアムゴールド社が保有するコテ金開発プロジェクトへの参入発表しました。今回、2024 年の生産開始を目指し、開発を進める同プロジェクトの現場を視察する機会を得ました。このプロジェクトは、コロナ禍の最中に投資が発表されたこともあり、連邦政府、オンタリオ州政府ともに注目のプロジェクトです。

サドベリーから大自然の中を車で約 3 時間北上。私自身、露天掘りの鉱山を見学するのは初めての経験でしたが、想像以上の壮大さでした。ピット自体が 2 キロ、1 キロの幅を持つ広さがあり、それを中心に約 6 キロ四方に各種施設が広がります。周囲には天然の湖、川も多いので環境に負荷を与えない開発が進められています。ファースト・ネーションの地元民との方々とのコミュニケーションも良好です。

現場では来年早々の生産開始に向けて急ピッチで作業が進められていました。現在約 2 千人の人員が 12 時間シフトで 24 時間、施設は稼働します。現在作業にかかわ

っている人たちは総勢 4 千人近くにもなるそうです。さながら一つの都市が出現している形でした。また運搬用大型トラックは DX を適用した無人運転を導入。作業の合理化、安全化が図られています。生産開始後は人員は 400 名程度を見込んでいるそうですが、巨大なプロジェクトであることに変わりはありません。18 年程度の採掘を予定しているとのことでした。



現場で働く住友金属鉱山の皆さんは、2週間や1週間のシフトを組んでサドベリーから現場へ通勤しておられます。2 週間は一日 12 時間の 2 シフトが続き、次の 2 週間はサドベリーに戻られます。ほとんどの皆さんが世界の鉱山を経験された方々でした。サドベリーの邦人数は数家族ほどでしたがコテのプロジェクトが開始されてから文字通り倍増したわけです。



サドベリーでは来る 7 月 22 日に日本フェスティバルが開催されます。こちらの方も楽しみです。

コテ地区からさらに北上した地域にリング・オブ・ファイヤーと呼ばれるニッケル、リチウム、コバルトなど多くの希少金属が存在するとされる地域があります。オンタリオ州政府は、これら希少金属を活用すれば、オンタリオ州内のみで電気自動車の生産は可能としています。鉱山地区が遠隔の地であるため、現場への交通手段や電力の供給など、インフラの整備などの課題はあります。5 月の G7 広島サミット首脳会合でも宣言されたとおり、レジリエントな経済、強靱なサプライチェーンの構築は、喫緊の課題でもあります。今回コテの金鉱山を訪問しましたが、官民をあげて、この地域の有効な資源活用が進むことを期待したいと思います。

(以上)